地域間格差

―地域リーダーのあるべき姿―

義憤 Vol. 34

幕末三舟のひとりとされる山岡鉄舟は剣、禅、書の達人として知られています。江戸城無血開城は、表舞台では官軍のリーダー西郷隆盛に対し幕府側では勝海舟が行ったとなっていますが、その下地を作ったのがこの山岡鉄舟である事は意外と知られていません。

西郷隆盛がその遺訓の中で「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」と語っていますが、これは山岡鉄舟を記したものだと言われています。

私も仕事柄いろんな国、または地方に行く機会が多くありますが、最近、特に感じるのは国家間、地域間格差です。

例えば同じ日本においても、私の出身地である熊本県は蒲島知事の代になって大きく活性化されましたし、福岡、仙台といった都市は地方の中核的な都市として発展しています。

ひるがえって創業の地である新潟県そして新潟市は人口減少に歯止めがかからず、その衰退の様は誰の目にも解るように感じております。

かなり厳しい言い方かもしれませんが、こうした衰退の最も大きな要因は、地域のリーダーたる首長を始めとする行政と議会の努力不足だと思っています。

民間の企業であれば、組織のトップの努力、力量が、組織の盛衰を決めるのは当然のことですが、それは行政においても同じ事だと思います。

地域も組織も活性化の根源は人材の育成、活性化に有ると思います。

地域の衰退は優れた人材、企業が育つ環境創りを、長期的にそして戦略的に行ってこなかった結果であり、また今日の努力こそが将来の地域の活性化につながるのは自明の理です。

地域の舵取りを行う行政そして地方議会は、その責任を強く持ち、もっと真剣に地域の将来に、夢と可能性を持てるリーダーシップを発揮するべきだと思います。

首長や議員の地位や肩書きは、その立場で何を成すかの為に有るものでしかない訳で、決して居心地の良いものではなく、責任と自己犠牲を伴うものでしかないと思います。

一期四年の歳月は決して短い期間では無く、何かを変え、また発展させてゆくには十分な時間だと思います。

官民問わず、明日が明るいと信じられる将来を創る為に、私心無く、世の為人の為、地域の為に、正攻法の努力を継続して実践するリーダーシップを、山岡鉄舟の生き様から学んでゆきたいものです。

生年は百に満たれどもただ千歳の憂いを抱く

(人は生きて百年 しかし、千年先の事を考える様な生き方をするという意)

リーダー的立場の人が、常に意識しなければいけない言葉ではないでしょうか。

徳真会グループ
代表　松村 博史